水の恩人　太田典徳

水に泣いた島で私財を投じて池を造った「太田典徳」

■ 太田典徳（おおた　てんとく）　1707年まで

瀬戸内海に浮かぶ小豆島もまた、昔から水の確保には大変な苦労がありました。太田典徳（伊左衛門ともいう）は、農民達の窮状を救おうと、ため池を築くことを考え、熱心に代官所に申し出てやっと許可を取り付けました。人足の不足などから工事は難航しましたが、典徳は私財を投じ、3年の歳月をかけて貞享3年（1686年）にようやく蛙子池を完成させました。そして同年6月15日、待望の水が肥土山村の二宮神社境内にまで達し、農民達は歓喜の声を上げました。ところが、蛙子池は堤防が貧弱で、ユルの材料の不備もあり、その後も様々な問題が発生しました。典徳は、これらの対策にも頭を悩ませ、心労もあってか宝永4年（1707年）、この世を去ってしまいました。

この太田典徳の大恩に報いるため、二宮神社の境内には豊水分霊（とよみくまり）社を建て、太田典徳夫妻をまつり、蛙子池の水がはじめて流れてきた6月15日を例祭日としています。干ばつが多数発生した讃岐では、水の確保をもたらしてくれる人は、農民達にとって神のようにありがたい存在だったことでしょう。香川県では太田典徳のほかにも私財を投じ、我が身を投げ打って、ため池の築造など水利開発に尽くした多くの人々がいます。そうした先人の苦労が、水を守り暮らしを守ってきたことを忘れず、水を大切にする心を持ち続けたいものです。